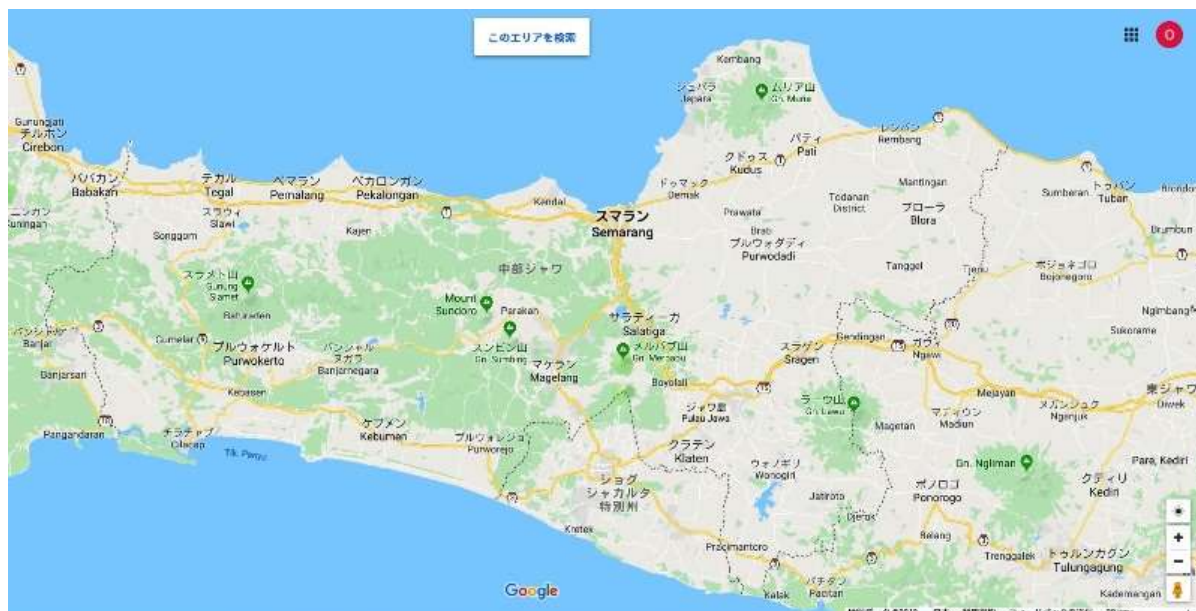


B-3 中部ジャワ

119. クジャウエンの地



ジャワ島にはジャワ人が住み、ジャワ語が話され、ジャワ文化が栄えてきたが、その中核となるのが「ジャウエン (kejawen)」である。その意味は「ジャワ的なもの」という文化概念で、日本語的にいうと“生粋のジャワ”という語感であろう。

クジャウエンとはジャワ的な色彩の強い地域をさす地理概念でもある。その範囲はスラカルタ、ジョグジャカルタ、マグラン、マディウン、クディリといった都市のあるジャワ中部から東部にかけての火山に囲まれた内陸部の古来より豊かな生産力に恵まれた稲作地帯である。

そもそも、ジャワ島にはジャワ以外の色々なものが入り込んでいる。ジャワ島にはジャワ人以外の民族も居住している。ジャワ島の西の 1/3 の西部ジャワはもともとスダ人の土地パスンダン(→105)である。また、ジャワ島に接し、ほとんど陸続きといえるマドゥラ島にはマドゥラ人(→614)がいる。マドゥラ人の多くはマドゥラ島対岸のジャワ本島のジャワ海側やジャワ島の東端部に移住している。

ジャワ島のパシシル(→136)といわれるジャワ海側は外国からのいわば玄関口であり、歓迎される客、招かざる客などとりどりに次々にジャワに押し寄せた。インド人、中国人、アラビア人、ポルトガル人、オランダ人、イギリス人などは新しい宗教や異文化をも伴ってきた。日本人も武力でもって押しかけてきてジャワ島を占領した。

ジャワ海の沿岸部に対する外国の影響は直接の“洗礼”であった。これに対して海岸から離れた山中のクジャウエンは、ジャワ海沿岸部がバッファーの役割を果たしたため外国の影響も間接的であった。ヒンドゥー教もイスラム教もオランダの持ち込んだ西洋文化も外国文化はすべて海岸地方で受け止められ、ジャワ流に加工され内陸部に移されてジャワ文化を醸成していった。クジャウエンのイスラム教はパシシルのイスラム教とは微妙な違和感があるものとなった。

外部から適度な刺激を受けながらクバティナン(→707)、ワヤン(→904)、ガムラン(→910)などのジャワ文化が純粋培養されてきた地がクジャウエンである。ジャワ人がジャワの生活信条に従い、言葉、

礼儀作法もジャワ流儀で悠々と暮している。F-5章「ジャワ社会とジャワ人」とはクジャウエンのことである。ジャカルタでインドネシア人が“ジャワ”へ行くという会話を外国人が聞くと「？」と思うが、インドネシア人にとってジャワとはクジャウエンのことである。

クジャウエンはサイレンドラ王国(→243)に連なるジャワ王朝の発祥の地である。オランダ植民地時代も中部ジャワのクジャウエン地域はマタラム王家(→250)の直轄領として残され、今も王家の後裔が敬愛を受けながら暮らしている。

120. ジョグジャカルタ市

「ジョグジャカルタ (Yogyakarta)」はその名からジャカルタの郊外とでも誤解されやすいが、ジャカルタ (ジャワ島の西端にある) から 500 km離れたジャワ島中部にある。内陸部のムラピ火山の裾野の豊かな平野にあり、人口 60 万人の都市である。一般にはジョグジャ (Yogya) と略され、フルネームでよばれることは少ない。

この都市と首都ジャカルタ、アチェ州の3州は全国 30 余州) のうち特別州として他の州とは行政上、別格の扱いをうけてきた。これはジョグジャがインドネシア歴史において重要な役割を果たした由緒正しい都市であるからである。

ジョグジャはオランダ植民地の中で生き延びたマタラム王国(→250)の古都であり、独立までスルタンがジョグジャ近郊のフォルスランデンという王侯地を支配していた。

同王朝最後のスルタンのハムンクブウォノ 9 世(→445)は民族主義者としてインドネシア独立を支持しオランダに抗した。また、ジョグジャは 1946～8 年の間、共和国がオランダと独立戦争を戦った際のインドネシア共和国の首都であった。古都でありながらジョグジャの名は共和国の創成期の歴史に深く係わる存在であった。

ムラピ山麓のジョグジャのある地域は「マタラム (Mataram)」といわれた。マタラムはジャワ王朝発祥の地であり、古代にサイレンドラ王国(→243)、古マタラム王国(→244)が存在した。近郊のボロブドゥール寺院遺跡やプランバナナ寺院遺跡がその証である。近世になって再びマタラムと名乗る王国が復活した。

ジョグジャは新マタラム王国のスルタン家のクラトン (王宮) の所在地である。クラトンと広場を取り囲んで市街地があり、バティック、銀細工、ガムラン楽器、影絵芝居の人形 (ワヤン) など伝統工芸品(→873)の生産が現在に受け継がれている。

クジャウエン(→119)のジャワ伝統文化の上に、現代の絵画、音楽、舞踏などインドネシア国民文化の芸術の中心地である。

アカデミーの名門ガジャマダ大学 (UMG=Universitas Gajah Mada) は 18 学部の総合大学でありインドネシア全土からの 35 千人の学生がいる。その他の各種の大学が多く、学生が目立つのもジョグジャの特色である。

ムハマディヤ(→419)という近代イスラム教運動の本拠地もジョグジャにある¹。首都ジャカルタに

¹ <編者註>一方の伝統的イスラムを標榜するナフダトゥルウラマの本拠地は東部ジャワ州のジョンバンにある。

対する政治の拠点である。

古都でありながら新しい側面がある。このジョグジャと良く似た都市が日本にもあり姉妹都市になっている。それはいわずもがな“京都”である。正しくは《ジョグジャカルタ特別州》と《京都府》は姉妹州である。インドネシア語では“山紫水明”とは言わないかもしれないが、ジョグジャは煙たなびくムラピ山をのぞむ風光明眉の地である。

観光都市としてインドネシアではバリ島に継ぐ観光地である。外国人観光客のためのホテル、一般旅行者のためのロスメン(→852)という宿泊設備も整っている。

121. クラトン/王宮

ジョグジャカルタとスラカルタはジャワの古都である。しかし、歴史の古さを古都の基準にするならば、この両都市は必ずしも古都とはいえない。何故ならジョグジャとスラカルタはマタラム王国が1755年に分裂(→252)してそれぞれの王家の王都となったもので、以降二百年余りの歴史に過ぎない。当初のマタラム王国の王都はコタ・グデにあり、内戦でスラカルタの郊外になるカルタスラに遷されたが、さらに王位継承戦争(→251)で焼失して捨てられ、再度スラカルタに遷都したものである。

歴史の長さから言えばジャカルタ(旧名バタビア)をはじめジャワ海沿岸の都市ははるかに古い歴史を有している。それにもかかわらずジョグジャとスラカルタは自他ともに認める古都である。その理由は両都市がクジャウエンの地にあり、ジャワの正統な王朝の所在地であり、王室によってジャワ文化の維持保存が行われ、現在も宮廷舞踊やワヤン、ガムランなどジャワ伝統芸能の“家元”だからである。

現在、王家の子孫は「クラトン(kraton=王宮)」の中の囲われた一画に居住している。ジョグジャのクラトンは淡い緑の壁、スラカルタは淡い青の壁に囲まれている。ジョグジャではクラトンの公的部分は、午前中だけ観光客に公開されている。

クラトンの中の建物の中心はプンドボ(→794)である。一辺が約50mの正方形の建物で中央の屋根は高く聳^{そび}えている。四方の柱からだけの巨大な東屋^{あずまや}である。大理石の床は冷たく風通しがよい。公式行事が行われる場である。屋内ではクラトンに伝わる宮廷舞踊の練習が続けられている。

アブディ・ダルム(abdi dalem)といわれる宮仕え人²が昔ながらの民族衣装で悠々とし裸足で歩いている。何をしているのか分らないが多分働いているのだろう。

整然としたクラトンの区画はあたかも京都の“御所”のようであるが、クラトンは御所以上の存在である。何故なら御所は天皇のいわば住居であるのに対して、ジャワのクラトンは“宇宙の中心”である。

ジャワ人の宇宙観に基づくワフユ(→706)という国王の権威をレイアウトしたものがクラトンである。王都から国王の威光は普く国土にいきわたる。

クラトンは正しく定める方角に従い建物は整然として配置される。各方角別に各々の意味があり、

² クラトンには1600人の人が働いている。政府の補助金があるとは聞いていないので、観光収入や、王室の事業で人件費を含む財政を賄えるのかと心配した。クラトンの宮仕え人はアブディ・ダルム(abdi dalem)と称する。「内部の従者」が直訳である。現在はアブディ・ダルムの下級職はボランティアに支えられている。仕事を細分しているので業務で忙しい様子はない。下位の従業員はベチャ引きなどの本職を有している。中位になっても食料用蝙蝠の捕獲などのアルバイトをしている。14階級あってクリスの携帯が認められるのは12階級以上である。⇒NHKアジア古都物語プロジェクト「ジョグジャカルタ(支えあう王と民)」

例えば東は男、西は女の住区と定められている。そこには身体障害者が招かれて居住する。身体障害者が持つと信じられている霊力を国王のものにするためである。

クラトンに隣接する一面に妃達が使用したといわれるタマン・サリ (Taman Sari) というプールがある。王の遊び場に見せかけてあるが、非常時には要塞となるためプールの底の秘密の通路が張りめぐらしてある。ロロ・キドゥル(→949)の宮殿に通じているともいわれる。

ジョグジャにはスルタン家以外にもう一つ 1813 年に分立したパクアラム王家(→253)がある。パクアラム家はブディ・ウトモ(→286)やタマン・シスワ(→289)関係者などの民族主義者を生み出した。

122. マリオボロ通

クラトンの南北にアルン・アルン (alun-alun) という広場がある。北広場は王宮の行事の行われる場所であり、王国の頃は騎乗の武技が披露された。近年は市民の集まる広場で普段はサッカーの練習や凧上げなどが見られる。

広場が最も賑わうのはスカテ (Sekaten) ンの時である。スカテンとはイスラム暦のナビ・モハマッドの日に合わせた王宮のガレベッグ (Garebeg) という一連の儀式³に先立って行われる催しである。参加すれば幸が訪れるという信仰があり、夜店が賑わい移動遊園地が1ヶ月ほど開催される。夜になると観覧車、メリーゴーランド、サーカスに人が繰り出し身動きができなくなるほどである。日本の夜店で見る子供の欲しがるお菓子や玩具の屋台が所狭しと並ぶ。

クラトンを見下ろすようにあるブレドゥバーグ (Vredebung) 要塞は 1765 年にオランダが築いた。クラトンに向けられた砲台はオランダとジャワの関係を物語る。

ジョグジャ市街の特徴はクラトンという王宮を中心として形成されてきたことである。インドネシア独立後は、クラトンの前庭の広場やタマン・サリは市街地に組み入れられたが、周囲 5km のクラトンの区画は残っている。

北にムラピ山に繋がる南北の線を基に王宮の建物は配置されている。スルタンが重要な決定をする際はこの線を往復したといわれる。王宮前広場から北にまっすぐムラピ山の方角に延びる「マリオボロ (Malioboro⁴) 通」がある。

マリオボロ通は単なる交通のためのスペースではなく、ジャワの中心を示している。いわば平安京の羅城門と御所を結ぶ大宮通りに相当する。正確にはマリオボロ通は主要交差点毎に名前が変る。マリオボロ通には官庁や銀行や百貨店やレストラン、市場もある。由緒ある建物では 1911 年に建設されたコロニアル・スタイルのガルーダ・ホテルがある。交通量が増えたため南から北の一方通行である。ジャカルタでは見られなくなったベチャ(→839)の往来があり馬車の専用レーンが設けられている。

喧騒の中にもジャカルタとは異なるジャワらしさがある。バリ島のクタやウブドのように多くの外国人観光客が散策している。乞食もスリもいる。

夕方になるとマリオボロ通は様相が変わる。プガメン(→865)という流し歌手が楽器をかかえて通る。観光客目当ての土産物の露天店に代わり、カキリマ(→858)やレセハン (lesehan) で埋め尽くさ

³ ガレベッグはスルタン・アグンがイスラム教の布教のために始めた王宮のイスラム行事であるが、ジャワ的要素が強い行事である。王宮の親衛隊のパレードがあり、グヌガン(供物)が市民に供せられる。

⁴ <編者註>煙草で有名な Marlboro という名前であったがいつのまにかジャワ語化してしまった。

れる。



Nasi Gudeg Yu Djumにて
2014/8/27

カキリマの飲食は日本のラーメン屋台のように椅子にすわるが、レセハンは路上にゴザをひいたレストランである。ジャワ人は椅子に座るより地面にしゃがむのを好む。レセハンは日本人の畳への郷愁と同じようなものらしい。ジョグジャ名物のナシ・グデ (Nasi Gudeg) はナンカ(→775)をベースにした煮込みをかけたご飯である。

華やかな表通りから一步裏に入るとスラム街であることは他の大都市と同じである。ブリンハルジョ

(Beringharjo) 市場というアメ横のような市場も近い。

1 2 3. イモギリ霊廟

銀細工の工房が集中している「クタ・グデ (Kota Gede)」はジョグジャの南東5kmの郊外になり衛星都市のように見える。しかし実はクタ・グデはジョグジャよりも古い由緒ある歴史を誇る街である。16世紀末期、マジヤパヒト王国の代官の家系であったスノパティ(→250)はクタ・グデの地で勢力を貯え王国に発展した。古代マタラム王国(→244)の由緒ある地名にちなみマタラム王国の名を名乗り、当初の首都がクタ・グデであった。

17世紀にアマンクラット1世(→251)の治世中にマタラム王国は内乱で略奪されたため、ソロ近くのカルタスラ (Kartasura) に遷都した。その後、王家の分裂によりジョグジャにクラトンが建設され王都となったのは18世紀以降である。

クタ・グデに創建者のスノパティとその息子の二代目クラブヤック(→250)の王墓があるが、スルタン・アグン(→337)以降のマタラム王家の墓は「イモギリ (Imogiri)」⁵にある。

イモギリはジョグジャの20kmの南方に低く連なる丘の一つにある。国王は神の代理人として生存中のみならず死後においても霊となって神と接するため天に近い山の上に設けられている。石段の頂上はマタラム王朝の最大の英傑であったスルタン・アグンを中心に墓室が並ぶ厳かな霊所⁶となっている。

スルタン・アグンの墓には多くの人が訪れる。聖地であるのでジャワ人はジャワ衣装、ジャワ頭巾の正装でおまいりにくる。345段の石段を裸足^{はだし}で上がり、墓室には膝まついて入り、墓前では叩頭^{こうとう}せねばならない。外国人といえども例外はない。

香が焚かれ、祈祷が捧げられる。厳粛な雰囲気が漂っている。子孫は食事、身の回り品持参で墓参りにきて墓の側で一夜を就寝する。偉大なる先祖から靈感を受けられるためである。

丘から16km先にインド洋を望むことができる。インド洋はマタラム王家の保護者である女神ロロ・キドゥル(→949)の支配する海である。王家の女神に対する秘儀^{ひぎ}はパラントゥリティス海岸で行われる。

⁵ イモギリは「霧の山」という意味である。

⁶ 右側にジャカルタ家、左側にスラカルタ家があり、4王家のうちラウ山麓にあるマンク・ヌゴロ王家を除く3王家の墓所である。

ソロ川の最上流になるジャワ島の南部はインド洋に並行して数百キロに渡り低く連なる台地はキドゥル (Kidul) 台地といわれる。石灰岩の台地は地味に乏しく保水性がないため稲作に適さない。採れる作物は陸稲、とうもろこし、キャッサバである。

そのような条件の悪い所にも人は居住してきた。王家はオランダに地味の肥えた良い土地を取られ、貧しいウオノギリ (Wonogiri) が王侯地として残された。貧しい地域は収奪されたであろうに、今なお王家への敬意を保っている。

ウオノギリにもダム建設など開発政策は講じられているが、ジャワ島で餓死者が出るとすれば最初にウオノギリといわれるほどであり、貧しい地域の代名詞である。過剰人口のこの地域は他郷に出稼ぎしか生活の方法がない。ジャカルタのメイド(→887)の多数はウオノギリ出身といわれる。

124. パラントゥリティス海岸

インド洋(→031)はロロ・キドゥル女神がいる南の海である。ムラピ山⇒クラトン⇒インド洋の軸線に「パラントゥリティス (Parangtritis) 海岸」がある。その海岸はマタラム王室の始祖スノパティ (→250)と女神のランデブーの場所である。

スノパティは海岸のパランクスモ (Parangkusmo) の岩の上で瞑想中にロロ・キドゥルに出逢った。瞑想を止めて彼女の海底の王宮に向かい、三日三晩の愛を伴にする。子々孫々、女神の庇護を受ける約束を得て地上に戻る。



その場所に女神の宮廷が作られ今日もジャワ王家の信仰を集めている。パラントゥリティス海岸を見下ろす砂丘の上にあるジャワの聖地である。二つの黒い岩のうち山型はスノパティであり、海側の細長くうねる蛇型の岩が女神である。

スノパティの子孫だけが女神に教えを乞う資格がある。ディポヌゴロ王子(→339)はここで瞑想にふけり、女神と交流から啓示を得てオランダへの反旗をひるがえした。

パラントゥリティス海岸では現在もマタラム王家の子孫によってラブハン (Labuhan) という女神への儀式が夜を徹して忠実に行われている。ロロ・キドゥル女神への儀式には王妃を伴わない。王妃が居れば女神が焼餅ひきもちをやくからである。

お祈りをして海にお供えを捧げる。海への捧げ物は波で岸に押し戻される。人々は争って拾い持ち帰り大事に保管する。女神への捧げ物は霊験あらたかなプサカ(→704)である。

パラントゥリティス海岸は荒涼とした砂浜がどこまでも続く海岸である。灼熱の太陽の下であっても南極大陸から遮るものもなく押し寄せるインド洋のうねりは大きくぞくっとする寒気さえ覚える。禁止されているにもかかわらず遊泳し波にのまれて溺死する人は絶えない。「また、ロロ・キドゥルが従者に連れて行った」という噂だけが後に残る。

ジャワには『クスモの花』という神話がある。ススフナン家(→131)の代々の君主は、即位に際して

南海の女王の精が乗り移ったとされるジョヨ・クスモの花を探させた。ジョヨ・クスモの花は幸福の花であるが、資格のない者が手に入れると不幸が待ち受けている。

ジョヨ・クスモという月下美人(→053)の花を見つけられるのはインド洋の波を受けるカンバンガン島 (Kambangan) である。

カンバンガン島はチラチャップ (Cilacap) 市の沖にある島でオランダ植民地時代に建設された監獄のため“監獄島”としても名高い。最近の著名な収監者はスハルト元大統領の息子トミー(→452)である。

チラチャップ港はジャワ島のインド洋側の唯一の港である。第二次世界大戦の際に予想を上回る速度の日本のジャワ島侵攻に、オランダ植民地政庁の高官はチラチャップから泡を食ってオーストラリアへ逃げた。ヨーロッパのダンケルクと異なり、ほとんどの蘭印軍兵は置き去りにされた。

⇒949.ロロ・キドゥル女神

125. 霊峰ムラピ山

ヒンドゥー教によれば世界の中心に須弥山^{しゅみせん}がある。須弥山は四方に高い山で囲まれている。中部ジャワのクドゥ (Kedu) 盆地⁷はこのような所である。盆地の北側のウンガラン山にグドン・ソゴ(→135)がある。周りはムラピ (Merapi 2911m) 山、ムルバブ (Merbabu 3145m) 山、スンビン (Sumbing 3371m)、シンドロ (Sindoro 3151m) 山などの^{そうちょう}荘重たる 3000m 級の火山である。

クドゥ盆地は別名 Bumi (Bumi) ともいわれ、ジャワ沿岸のスマランとジョグジャを結ぶクドゥ街道が通じている。肥沃な農業地帯で“ジャワの庭園”ともいわれる。

クドゥはマグラン (Magelang) 県に属し州都はマグランである。ちなみにマグランは反乱したディポヌゴロ王子(→339)がオランダに捕われた所である。当時の建物が保存されており、ディポヌゴロ博物館として関係資料がある。

マグランにはオランダ時代から軍の学校があったが、インドネシアになって陸軍士官学校の所在地である。年功序列の国軍の人事において“マグラン X 期”という X は重要なファクターである。

クドゥ盆地を囲む秀峰の中でも名高いのは活火山のムラピ山である。ムラピ山のムラピの意味は merah は「赤い」、api は「火」である。名のごとく火を吐く活動の激しい活火山である。暗黒のジャワの深夜に山頂の赤い火は神秘そのものである。ムラピ (メラピ、マラピとの表示もある) という名の火山はインドネシアにはスマトラ島、東ジャワにもある。

過去におけるムラピ山の火山活動は仏教遺跡のボロブドゥールで知られる。1814 年、ラッフルズ(→338)よってボロブドゥール寺院遺跡が発見された時、この遺跡はすっかり樹木に覆われていた。ムラピの爆発は 30 km も離れた小山ほど巨大な構築物を埋め尽くすほどの威力であった。

中部ジャワで栄えた古代マタラム王朝(→244)は東部ジャワに移動し、それから数世紀の間、ジャワ史から中部ジャワが欠落するのもムラピ山爆発の後遺症である。

オランダ支配当時の 1930 年にも爆発した。火山の爆発を感知した当局側は安全のため農民に避難を呼び掛けたが、農民は聞こうとしなかった。なぜなら農民は当局が騙して土地を没収しようとして

⁷ ジョグジャカルタ、スラカルタ、スマランの三点を結ぶ三角形はジャワ文化のゴールドトライアングルである。その中央にムラピ山がある。

いると勘繰ったからである。この際の死者は 1400 人である。

ムラピ山は溶岩ドームの形成⇒崩壊という過程を繰り返しているため、世界でも最も危険な火山の一つにランクされており、立ち入り禁止のことが多い。頂上付近は蟻地獄のような急勾配になっており滑り落ちながら登るそうである。中腹 900m の所にカリウラン (Kaliurang) 森林公園がある。ジョグジャの避暑地である。

発掘されたポロブドール遺跡の仏像越しに見えるムラピ山はピラミッドのような端正なたたずまいである。南国の熱気の中では山が見えるのは早朝だけである。気温が上がると大気は霞み頂上の煙も見えなくなる。ムラピ山への畏敬のため、王室によってラブハンの儀式(→124)が行われる。

126. ボロブドールの発見

ジョグジャから約 40 km離れたムラピ山の麓に仏教遺跡の「ボロブドール (Borobudur)」がある。1814 年、当時の英国のジャワ副総督ラッフルズ(→338)は火山灰に埋もれていた建造物を発見した。仏像らしきものが出てくる遺跡の存在は知られていたが、イスラム王国の君主はもとより、VOC(→272)も金儲け以外のことには無関心であった。ラッフルズはその遺跡の重要性を学会に紹介したという意味での発見者である。

丘の上に 120m 四方の底辺に 8 層に積み上げられている。下 5 層は方形であり、各方位に仏像が安置され、上 3 層の円壇上には等身大の石仏がそれぞれ石室の中に座している。しかし中には石室がなく剥き出しのもの、石室ごとないもの、身体の損傷したものがあり、完全な形ものは少ない。

仏教の発祥地のインドはもとより仏教遺跡でボロブドールのような形式のものはない。ジャワには祖先崇拜の霊場⁸として基壇を積み上げる慣例があったらしい。たまたま移入された仏教思想を取り入れて仏教の本場のインドにもない新たな仏教様式が生み出された。当初は小乗仏教の影響が強く、後期には大乘仏教・密教の思想を反映している。ボロブドールは金剛界曼荼羅^{まんだら}の立体形といわれる。

遠望すれば土饅頭^{まんじゅう}型の丘はインドのストーパーといわれる仏塔を思わせる。ボロブドール遺跡の素晴らしさは小山ほどもある石造物のみならず、各層毎の回廊の壁にほどこされた浮き彫りにある。仏教に関連する場面が延々と回廊にそっておりその長さは延べ 3 km にもなる。炎天下のむき出しの石は焼け付くように熱い。赤道に近い地であるから影になる所もなく、見て歩く時間は限られている。

釈迦^{しやか}の生涯を表した仏伝図など判りやすいものもあるが、仏教説話らしいが意味が分からないものもあるらしい。石の上に生き生きと描かれた農耕の有様、航海の様子などから当時の生活がしのばれる。

ボロブドールの東に「パウオン (Pawon)」という優美な寺院遺跡があり、さらにその東に「ムンドゥット (Mendut)」という遺跡がある。ボロブドールの正面は東であることからこれら 3 つの遺跡がほぼ直線上に位置する。

⁸ インドネシア文化の基層に巨石信仰(→700)がある。

赤道に近い太陽の降り注ぐ屋外からムンドゥット寺院の中に入ると暗闇に見上げるように釈迦像が浮き上がり思わず足がすくむ。両脇に菩薩像がある。回廊の側壁の浮き彫りは古代ジャワ美術の精華である。よくも無事に保存されてきた。ボロブドゥールとムンドゥット寺院の間にあるパウオン寺院はやや小さく建物だけで本尊はない。

いずれも優れた仏教遺跡であり、建築時期もボロブドゥールと同時期とされている。ボロブドゥール見学の帰りに時間があれば立ちよるが、ボロブドゥールの印象が強烈であり、見る方もくたびれ果てているので、後になり後悔する。少なくともムンドゥット寺院はここだけのためにでも訪れる価値がある。

127. ボロブドゥールの復興

インドから中央アジア経由の仏教が日本に定着した平安初期の頃、インド洋経由の仏教はジャワ島でもその最盛期であった。9世紀にサイレンドラ王国(→243)のサマラトゥンガ王が国力を総動員して建造したのがボロブドゥール寺院である。

780年に起工され、少なくとも3代の王にわたり工事が続けられ、その間には設計変更もあった。近年の修復工事で基壇の内側に当初の基壇が完成された状態で埋め込まれており、設計変更のため途中で規模が拡大されたことが明らかになった。

遺跡が発見された当初、オランダの学者は被支配者たるべきジャワ人の祖先がかくも立派な建築工事を行ったことに衝撃を受け、しばらくはジャワ人が建造したことを認めようとしなかった。その頃のオランダは、多分、ゲルマン人が徘徊する北海沿岸の荒涼とした低湿地であり、オランダ人の先祖の野蛮人が動物を追いかけていたからである。

カンボジアのアンコールワット遺跡と並びボロブドゥールは東南アジアの仏教遺跡の双壁である。両者の関係はボロブドゥールが先行してアンコールワットに影響を与えたという説の方が有力である。

その後、ジャワでは仏教は衰退に向かった。たまたまムラピ山が爆発し、このように大きな建造物も埋もれて歴史から忘れ去られていた。これは火山の噴火の大きさもさることながら仏教からヒンドゥー教、さらにまたイスラム教と入れ替わる“文化の断絶”の厳しさを思わせる。

ボロブドゥール遺跡が現在のような形で残ったのは最もよい保存方法として土の中に埋められていたからである。もしも火山の爆発がなくて火山灰に埋もれなかったならば、灼熱、風雨の自然破壊に耐えられたらどうか。

ボロブドゥール遺跡頂上にて
1977年9月 編者



石といえども熱帯の日中の灼熱はきつはずである。軟い安山岩の浮き彫りは今にもボロボロと崩れそうである。もっとも復元再生の際に樹脂加工で劣化を防止する処置が施されているとのことである。

崩れて埋もれた石造建築の復元は立体ジグソーパズルのようなものであろう。ボロブドゥールの修復整備はエジプトのアブシンベル神殿と並ぶユネスコの二大事業であり、2200万ドルの費用と10年以上の歳月を要

し 1983 年に完成した。

盛大な記念式典が挙行され、スハルト大統領はボロブドゥール遺跡は国民的宗教財産であると述べた。しかし 1985 年にはイスラム過激派によってストーパー 9 基が破壊⁹された。異教の偶像がちやほやされることへの警告であるといわれる。2001 年のタリバンによるバーミアンの仏像爆破と同列の暴挙である。

かつて執拗^{しつよう}さで観光客を困らせた土産物売りも追い払われた。周辺の農地は安い値段で買い上げられ公園として整備された。今、ボロブドゥールの地には仏教徒は皆無である。観光客が群れをなしてやって来るが、地元の住民にとってこの遺跡は信仰とは何の関係もない外貨獲得用の観光資源の巨大石造物にすぎない。

128. プランバナンの遺跡

古代マタラム王国(→244)時代の遺跡である「プランバナナ (Prambanan) 遺跡」はジョグジャの東方 15km のプランバナナ村にある。ヒンドゥー遺跡の中心にあるロロ・ジョングラン寺院は 110m 四方の内苑の中央に三つの堂があり、シバ神、ブラフマ神、ウイスヌ神のヒンドゥーの三主神¹⁰に捧げられている。

中央にそびえるシバ神を奉る堂には背面にシバ神の妻ドゥルガー女神像がある。ドゥルガーの艶かしい像、屹立する堂の優美な姿からロロ・ジョングランという美女にちなむ伝説が伝えられている。シバの像の聖水は溝のある受け皿に集められ、ドゥルガーの陰部を象徴するヨニに注がれる。



プランバナナ遺跡
1978 年 9 月 編者撮影

プランバナナで遺跡を舞台にして乾季の満月の夜にラーマヤナ(→945)の舞踏が行われる。ガムラン奏者併せて出演者 250 名の大スペクタクルであり、燃え盛る炎の舞台のハヌマン(→952)の背後に 3 塔^{そび}が聳える。興福寺の五重塔を背景に“新能”^{たなきのう}を見るような幻想の世界は一度見れば生涯の記憶となる。

プランバナナ遺跡は 1549 年の地震^{がれき}で瓦礫の山になって以来、放置されていた。ボロブドゥール遺跡と同様に国際協力によって中央の三つの堂は修復された。ロロ・ジョングラン遺跡は三重の壁に囲まれており、中の壁は 222m、外の壁は 390m に達する。

その北側にあるチャンディ・セウ (Sewu) を初め周辺に散在する幾多の遺跡を総称してプランバナナ遺跡というが、今日プランバナナ遺跡として公開されているのはほんの一部にすぎない。遺跡全体が史跡公園に指定されたのはよいが、観光客を意識するあまりテーマパークのような感じがするのは惜まれる。

ロロ・ジョングラン遺跡から北東 3km にあるプラオサン (Plaosan) 遺跡は仏教寺院である。マタ

⁹ ボロブドゥールの爆破はタンジュン・プリオク事件(→167)への報復のため盲目のイスラム導師アル・ハブシ(Al Habsy)によって引き起こされ、12 年間の服役を受けた。

¹⁰ 3 主神を総称してトリムルティ (Trimurti) という。図像としてはブラフマ神を中心に左右にシバ神とウイスヌ神を配するが、人気ではシバ神とウイスヌ神が勝る。

ラム王国のラカイ・ピカタン (RakaiPikatan) 王がヒンドゥー教のロロ・ジョングラン寺院と同時に仏教寺院も建立した。二つの宗教並立の謎の鍵はサイレンドラ王家(→243)出の后にあるらしい。プランバナナ遺跡群に見られる寺院のヒンドゥー教と仏教の相互乗り入れはインドネシアの重層信仰(→695)の表われであろう。

石造建造物は地震に脆くこれまでもたびたび破壊されてきた。散在する遺跡は敷地の外側にも黒い石が野積みそのまま墓地のように連なっている。実際は周辺の住民が建築材料にするため多くの石を持ち去ったのであろう。イスラム教徒にとって偶像を崇める建造物は邪教以外の何物でもなかった。



プランバナナ遺跡を見下ろす東南部にラトゥ・ボコ (Ratu Boko) という丘には古代マタラム王国のクラトン(→121)と推測される遺跡がある。プランバナナ平原とムラピ山を望む絶景の地である。現在のラトゥ・ボコの丘は荒涼^{ころりよう}として観光客はおろか農夫も見当たらないが、遺跡が整備されて観光客が来るようになると、その観光客相手の土産物売りの喧噪^{けんそう}も押し寄せて来るであろう。

⇒950.ロロ・ジョングラン

129. クラテンの砂糖工場

第二次世界大戦前まではジャワ島は世界有数の砂糖(→778)の生産地であり、輸出国であった。独立後、ジャワの製糖業は衰退したが、壊滅したわけではなく現在も地場産業として健在である。以下に工場を実地見学した北端辰昭氏のレポートを引用した。

ジョグジャカルタとスラカルタの間になるクラテン (Klaten) 県に国営砂糖工場があり、施設の一部は砂糖博物館になっている。そこでは18世紀初頭のフランス製の蒸気機関がまだ動いている。砂糖キビを粉砕、圧搾する圧搾機械は1860年製のオランダ製である。巨大歯車や蒸気タービンは1912年製のベルギー製、軽便蒸気機関車は1920年製のドイツ製等々、教科書でしかみられないような産業革命当時の機械設備がドッサリある。さながら18世紀の産業技術史博物館である。

砂糖キビを粉砕・圧搾する巨大な歯車には重油がべったり、テカテカ光らせながら、ギョギョギョと軋^{きし}んでいる。歯車の芯は歪み、楕円を描きながら回転している。工場の床にはいたるところに油がこびりつき、天井は埃だらけであり、およそ食品工場らしくない。

精製過程中、いたるところに、ベルトコンベアから粗糖がぼろぼろ床に落ちている。わざと落とされているように見えるほどで、無駄が多すぎる。それにしてもまあこんな古い機械をよくもだましだまし使っているものだと、その我慢強さに感心するやら、あきれやるである。

しかしこの工場はこの地域の実情にあった、農業と地域が一体化したいかにも農村工業らしいシステムでもあることが分かる。つまり、砂糖キビは収穫までに半年間かかる。収穫後の半年間工場を稼働させ、後の半年はメンテナンスを行うらしい。工場内に旋盤^{せんばん}やフライス盤などの機械の修理工場がある。

工場労働者の大半は、周辺の砂糖キビを作る農民で半年は砂糖キビを作り、半年この工場働いて

いるらしい。古い機械設備であるから恐らく償却費用は不要であろう。国営工場であるから維持出来ているのかも知れない。

省エネルギーや生産性という観点からはロスが多すぎるように見えるが、粉碎された砂糖キビの屑を、蒸気タービンの燃料や蒸気機関車の燃料に使うなど、それなりに農業と工業間の産業リンケージの工夫があり、自己完結型の資源エネルギーリサイクルが見られる。ちなみに蒸気機関車だけを見にはるばる日本から来るSLファンもいる。

まさに古きよき時代の農村工場をみる思いがする。自然エネルギーの利用と自己完結型の資源エネルギーのリサイクル、産業と環境の調和など、日本が逆に学ぶべきことが実に多い。近代工業システムがすべて環境に優しく、経済合理性に優れている訳ではない。それとは逆の生産方式を採る朴訥^{ぼくとつ}な農工一体型の、19世紀型農村工業がジャワの農村で稼働している。ちなみにインドネシアの民間の砂糖工場の設備は新しいとのことである。

クラテンの名は国立博物館(→159)でも頻繁に見かける。プランバナナ遺跡と総括される多くのチャンディ遺跡群の所在地はクラテン県である。

130. 古都スラカルタ市

ジャワ島は細長い島であるため川の長さはスマトラ島やカリマンタン島と比べると短い。その中でもソロ(Solo)川の全長540kmはジャワ島で最長で、ムラピ山、ラウ山を水源としてスラバヤ西方でジャワ海に入る。

ソロ川流域は王朝の興亡した歴史ある土地である。人類の歴史にもかかわる川で“直立原人”の骨が発見されたのもソロ川のトリニル河畔(→138)である。

インドネシア人のみならず日本人にも知られている『ブンガワン・ソロ(ジャワ語でソロ川の意味)』はグサン・マルトハルトノ(→985)というインドネシアの音楽家の作詞、作曲のインドネシアの国民歌として愛唱されているクロンチョン(→984)である。

「スラカルタ(Surakarta)市」はソロ川中流にある。同市は河の名にちなみソロ市ともいわれる。スラカルタは1745年にマタラム王家パク・ブウォノ2世が王位継承戦争(→251)の戦乱で荒廃したカルタスラ¹¹より都をソロに移しスラカルタ(英雄の街の意味)と命名した。

遷都に際しては3個所の候補地をドゥクン(→866)に占わせた。どこもよくなかったが、ソロ村が比較的ましであった。ソロのその後は不運であり、独立後も二度の大火に会っているのは、そもそも最初から予言されていたのである。

スラカルタとジョグジャは王室が分立されて以来のライバル関係にある。〈ジョグジャカルタ〉が《京都》に〈スラカルタ〉は《奈良》に比されるが、人口は40万人とスラカルタがジョグジャをやや上回る規模である。観光客にその名がジョグジャほど知られていないので“観光客のいないジョグジャ”といわれる。

教育、政治、観光、空港など色々な分野でジョグジャが先行し、スラカルタは後塵^{こうじん}を拝しているが、

¹¹ マタラムの王都は当初は現在のジョグジャカルタ近郊のプレレド(Plered)にあったが、トルジョヨヨに破壊されたため、アマンクラット1世を継いだアマンクラット2世はVOCに助けられて1680年に現在のスラカルタ近郊のカルタスタ(Kartasura)に新都を設けた。

その分だけスラカルタはジャワの伝統を最も濃厚に残しており、街中でも古い風俗を見ることができる。

呼び名はソロ＝江戸、スラカルタ＝東京という対応関係であるが、各種表示では両者が併用されている。ちなみにジャカルタ、ジョグジャカルタ、スラカルタ、カルタスラに共通するカルタ (Karta) は「街」という意味のジャワ語である。

ソロ観光の名所としてかつての王宮であるススフナン家のクラトン (王宮) は開放されている。1985 年ススフナン家のクラトンは火災で焼けたため建て直した。パゲララン (Pagelaran) というクラトンの中心である大きな建物はヨーロッパ舶来の華美な調度品で飾られている。博物館ではワヤン、ガムランなどのプサカ(→704)が展示されている。

分家のもう一つのマンク・ヌゴロ王家(→252)のクラトンはホテルになったが、営業不振で閉鎖された。その後はどうなっただろうか。

スラカルタはジョグジャカルタとともに“ジャワ人の心臓の鼓動するところ”というクジャウエンの地にある。ジャワ人の精神の拠り所であるクバティナン(→707)の本部はソロにある。

131. ススフナン家

スラカルタの「ススフナン (Susuhunan) 家」はマタラム王朝(→250)の嫡流^{ちやくりゅう}にあたる。マタラム王国の王位継承争いの際、オランダが介入し 1755 年、ギアンティ条約(→252)によりマタラム王国は分割され、新しく分家のジョグジャカルタ家が設立された。

その際に領土のみならず称号も分割され、本家のスラカルタ家は“ススフナン”称号を確保し、ジョグジャカルタ家は“スルタン”称号を引き継いだ。ススフナンの方が格が上である。ちなみにススフナンとはサンスクリット語の“宇宙の留め金”という語源で“皇帝”のことである。ススフナン家の紋章は北極の位置の留め金に地球儀が描かれている。

ススフナン家の歴代の王では植民地末期のパクブウォノ 10 世¹²の浪費が著名である。スラカルタの主要な建造物を建てた。ちなみに近年のススフナン家の週刊誌的話題は跡目争い¹³である。

スラカルタにはススフナン家とは別に「マンクヌゴロ家」という王家がある。第 3 次王位継承戦争で反乱したマス・サイド (Mas Said) は 1757 年のサラティガ条約(→252)で独立の王家となった。マンクヌゴロ家は分家の位置付けになり、敷地も 900 m²に過ぎずクラトンは小さい。松本亮(→364)著『ジャワ夢幻日記』はマンクヌゴロ王家の一角に寄宿し王家の文化人との交友の記録である。王家の日常生活が興味深く描かれている。

インドネシア独立戦争の際、ジョグジャのスルタン家は民族主義者のハムンク・ブウォノ 9 世(→445)が当主であった。1945 年 8 月 17 日の独立宣言を知るや直ちにスルトンの領土も共和国に属する

¹² パク・ブウォノ 10 世(在位 1893–1939)とオランダ人理事官の写真はジャワ王室とオランダの関係を象徴する歴史資料である。パク・ブウォノ 10 世は長期の在位期間中に多くの記念碑(PBX のイニシアルがある)を建てた。実態はオランダ人理事官が支配していてもあたかも絶対権威者のようにジャワ人には臨み、ジャワ人は王は魔力を持つと畏れた。ジャワ王朝最後のエンペラーとして記憶されている。パク・ブウォノ 10 世の浪費に手をやいたオランダは王の死後、予算を半減にした。(Java Indonesia, Periplus Adventura guides)

¹³ 2004 年 6 月ススフナン家のパク・ブウォノ 12 世の死去に伴い、四男と長男が跡目争いを行い、両者が即位をするという異常事態になった。親族会議は長男ハンガブヒ王子を推挙したが、王宮評議会は軍人である四男のトゥジョウラン大佐を推した。

というインドネシア独立支持の電報を打った。

オランダとの独立戦争の際にインドネシアは首都をジョグジャに移した。スルタンの協力があつたことはいふまでもない。スルタンのハマंक・ブウォノ 9 世は新生インドネシアの大臣の要職を経て副大統領も務めた。

これに対してスラカルタ王家の一族にも民族主義者はいたが、インドネシア独立にスラカルタの両王家は出遅れ、独立戦争でも“洞が峠”をきめこんだ。その差が現在の〈分家〉のジョグジャカルタは“特別州”となったのに対して〈本家〉のスラカルタはただの“古都”の理由である。

インドネシア独立により王家の土地は没収され王家の特権はなくなった。しかしジャワ文化のパトロンとして宮廷舞踊、ガムラン演奏者、ダラン(→874)や多くの宮廷雑用の従者を抱えなければならず王家の財政は苦しいはずである。

スハルト大統領になって以降、大統領夫人(→451)がマンクヌゴロ王家の係累ということでスラカルタにも日の目があたるようになった。

その後のエピソードは王家の若当主ドゥジョオ王子がスハルト大統領の末娘との結婚話を断った。後に王子がマンクヌゴロ家を継いだ時にマンクヌゴロ 10 世の称号を名乗ることに大統領筋から横槍が入った。スハルトの三男フトモ(→452)の結婚相手は王家からである。クラトン内のホテル建設はスハルト家の資本が入っているはずである。

1 3 2. ラウ山の霊廟

「ラウ山 (Lawu)」はソロの東方 30km にある標高 3265 呎¹⁴の死火山¹⁴である。形の整った山容は霊峰として崇められてきた。クバティナン(→707)の霊場であり、瞑想のための修行小屋や洞窟がある。日本でいえば大峰山か白山のような存在であろう。

山岳信仰(→699)の証である寺院遺跡が山腹に二つある。一つは 900m の所のチャンディ・スク (Sukuh) である。もう一つは 1400m の所のチャンディ・チェト (Ceto) である。両寺院とも 15 世紀に建設されたマジャパヒト王国(→248)末期の遺跡である。ジャワ島を蚕食^{さんしょく}するイスラム教を逃れて、ヒンドゥー教はラウ山に潜^{ひそ}んだものであろう。



チャンディスク
2005/3/29 編者撮影



チャンディチェト
2007/5/19 編者撮影

¹⁴ ラウ山は 1885 年以来噴火活動を行っていない。

西斜面にスク寺院の本殿は石段の壇上にありメキシコのマヤのピラミッドを思わせる構造である。ラウ山とスク寺院の配置がバリ島のアグン山(→179)とブサキ寺院(→180)の配置に対応する。寺院の境内にはワヤンを思わせる石像の人物像がある。ヒンドゥー色よりはイースター島などのポリネシアの遺跡に通じものがあり、巨石文化(→700)と結びついた山岳信仰の色合いが濃厚である。

両寺院はエロチシズムで有名である。リングとヨニ(→981)の石造物がある。近くの村の掟^{おきて}によれば女性はサロン(→781)をつけてリングに跨がねばならぬ。サロンが破ければ不貞の証拠である。

ジャワのマタラム王家霊廟はイモギリ(→123)にあるが、4王家のうちマンクヌゴロ家(→131)の霊廟だけがラウ山にある。さらに今世紀にもう一つラウ山に加わった聖所は元大統領のスハルト家の霊廟である。計画段階から論議を呼び、「国民が飢えている時に為政者が墓をつくるのか」という道義が問われたが、1993年ティエン夫人(→451)の70歳の誕生日に合わせて完成式が行われた。

1000万ドルという噂に対してわずか100万ドルにすぎないというのが側近者のコメントである。どうせ国費も私費も区別つかない一族であるから費用のことはさしおく。ラウ山に霊廟を求めるといふ行為の意味するところが問題でなかろうか。

インドネシアを旅行していて立派な墓地に気が付くとそのほとんどは華僑のものである。一般のイスラム教徒の墓は驚くばかりに質素である。例外的にイスラムの聖人や国王には立派な墓が造られる。

ちなみに初代大統領スカルノの墓は出身地の東ジャワのブリタル(→147)にある。本人の遺言ではバンドゥンカボゴールに墓を求めたが、当局の意向により東ジャワになった。首都に近すぎるのが忌避された理由とされる。

スハルト家霊廟はマンクヌゴロ家の霊廟から遠く仰ぐことはできるらしい。植民地時代のマンクヌゴロ家はオランダのお情けでジャワの王家に取り立ててもらい、ソロ周辺の僅かな領地を支配するにすぎなかったが、スハルト家はインドネシアの支配者になった。スハルト大統領はラウ山に霊廟を築き、スハルト王朝の創設者の心積もりであったらしいが、1998年5月の政変であえ無くも失墜した。

133. ディエン高原

「ディエン(Dieng)高原¹⁵」はジャワ島中央にある海拔約2000mのカルデラからなる高原である。取り囲む山岳、点在する寺院遺跡群、霧にけむる沼、硫黄・熱水を吹き出す源泉等々と神秘的な空間である。東西800m、南北1800mのプラウ(Perahu)山の火口原には1814年に発見された頃は大きな湖であったことを偲ばせる沼と湿地帯も残っている。沼の濃い緑色は湖底の鉱物質である。

この高原にあるヒンドゥー遺跡はジャワ島で最も古く7～8世紀頃のものである。かつては200もの寺院があったと推定されているが、今日では8箇所の建造物が残るのみで、その内5箇の建造物は一個所に集中している。

アルジュナ寺院、ビマ寺院は芸術的にも優れた建造物である。寺院の名はマハーバラタ(→946)にち

¹⁵ 「Dieng」の語源は古ジャワ語で「神々の場所」とサンスクリット語の「火の山」の両説がある。

なんで後の時代につけられたものであろう。ちなみにジャワ人はアルジュノ(→948)の住処はディエン高原にあると信じている。

ジャワ島のもう一つ古いヒンドゥー遺跡であるグドン・ソゴ(→135)も高山にある。ジャワ人は山岳信仰(→699)の場所へ異国の神を迎え崇めたと思われる。ディエン高原の遺跡にちなむ政治権力の所在は明らかでないが、古代マタラム王朝(→244)時代に政治権力とは独立した宗教の聖地として建設されたものらしい。

かつては寺院に仕える僧侶や巫女が多数居住していたであろうが、今日は昼間訪れる観光客を除けば農家が点在するだけである。

高原の気候は涼しく氷結することさえある。高原を取り巻く火山のスンドロ山、スンビン山は富士山そっくりの秀峰であり何れも 3000mを超える。一帯は山から降りてくる霧と溪谷から湧き上がる温泉の硫黄臭いガスに包まれている。ジャワ人にとって山に囲まれたディエン高原は霊場である。

ディエン高原には火山性の洞窟がいくつかある。その一つワルナ (Warna) 湖の側にあるスマル洞窟はスマル(→906)の住処と見なされているクバティナン(→707)の聖所である。ジャワ人が瞑想のためにやってくる。スハルト大統領のお気に入りの場所であった。

1974年にスハルト大統領は当時のオーストラリアのウィトラム首相を案内して洞窟内で“四目 (empatmata) 会談”をした。四目会談とは通訳や事務局なしのトップ二者の会談である。翌 1975年に断行した東ティモール侵攻(→427)の事前了解であったらしい。外国首脳はインドネシア大統領に洞窟へ招かれた際は覚悟せねばならない。

ディエン高原はジョグジャから車で約3時間の距離である。ウォノソボ (Wonosobo) から高原を上がる道が唯一の入り口であり、そこで入園料を払わねばならない。最近ではジョグジャへの観光客のリピーターがディエン高原を訪れるようになった。

神の鎮座する聖所にも高原野菜を栽培する農家が増えた。温泉がたれ流しになっている。そのうちリゾートという名の魔物に狙われるであろう。

134. スマラン市

「スマラン (Semarang) 市」はジャワ海に面する中部ジャワ州の州都である。VOC(→272)は 1678年にスマランの地をマタラム王国(→250)に譲渡させ、1708年にジュパラから中部ジャワの統括本部を移した。

以降、中部ジャワの豊かな後背地を有し、砂糖、コーヒー、米などの熱帯作物の輸出港として急速に発展し、インドネシア有数の商工都市となり、バタビア、スラバヤに比肩する経済力を有した。朽ち欠けたレンガ倉庫が植民地時代の栄華¹⁶を物語る。

植民地時代にジャワ最大の華僑財閥として世界に名を轟かせた建源財閥(→675)はスマランを地盤として大をなした。

市の中心のラワン・セウ (Lawang Sewu) は千の扉のある奇妙な建物はオランダ人知事の邸宅であ

¹⁶ ホテル、レストラン、教会、駅などはオランダ植民地時代のレトロ雰囲気のまま現在も営業中である。落ち着きがあり古都の風格さえ感じられるのはジャカルタほど変化は激しくないからである

る。1753年に建設されたブレンドゥック（Blenduk）教会は銅葺きのドームの屋根の美しい建造物である。今日も信者を集めている。

都心のプムダ（Pemuda）通りは“青年通”という意味である。プムダ通が他の大通りと交差する市の中央にある蠟燭型のトゥグ・ムダ（Tugu Muda 青年の塔の意味）は独立戦争のスマラン事件の犠牲者を悼む記念碑である。日本人にとっては民間人が虐殺された痛恨の地であるが、インドネシアにとっても独立戦争の重要な聖地である。

スマランの歴史の特記事項は1405年の鄭和（→666）の来訪である。以降、華僑のスマランへの移住に拍車がかかり、スマランは“華僑の街”といわれるほどになった。今日でも中国系住民の比率が高く人口の40%を占めるといわれる。

チャイナ・タウンにある大覚寺（Tay Kak Sie）は華人の信仰を集め、祭日でなくても線香の煙が立ちこめている。主神は観音菩薩である。スマラン最大のお祭は旧暦6月29日の大覚寺から郊外の三宝寺院への華やかな巡行であった。

スマランは今日も中部ジャワの政治、経済の中心で、人口139万人（2003年）でインドネシア第五番目の都市である。ジャワ島では東京に対応するジャカルタと大阪に対応するスラバヤの中間にあるという位置からも日本の名古屋に相当する重要な都市であるが、近年はその格差が広がりつつある。港が小さく、コンテナ化に対応する大型船の入港が出来ないのがネックである。

地理的にスマランはジャワ島の中心であることからオランダ植民地時代は鉄道を中心となった。1920年に共産党の東インド支部がスマランで声をあげた。鉄道労働者を中心に社会主義（→288）が蔓延したことからスマランは“赤い都市”といわれていた。

ちなみに市の南のアンバラワ（Ambarawa）にかつてジャワ島で活躍した蒸気機関車が収集されている鉄道博物館がある。植民地時代に欧米からジャワ島へ輸出された多種多様の蒸気機関車21台が展示されている。歯車式のアンティック型の高原鉄道用機関車は12kmの距離を実際に運転しており世界中のSLファンの人気が高い。

⇒320.スマラン事件

135. 三宝寺院

明の永楽帝は中国人のイスラム教徒である鄭和を総督とする南海遠征の艦隊を派遣した。鄭和はマラッカを基地として四方へ使節を發し、1405年に鄭和自身がジャワへの使節としてスマランを訪れて滞在した。スマランは当時からの古い港町である。



市の西方にあるグドン・バトゥ（Gedung Batu）という洞窟寺院は中国人の鄭和を祭っており三宝廟（Sam Po

Kong¹⁷⁾ともいわれる。三宝廟の名は鄭和の官職が三宝^{たいふ}大夫であったことにちなむ。鄭和はイスラム教徒であるため三宝廟は当初モスクであったものが、スマランに中国人が増えるに従い中国寺院の色彩が強くなった。そして今日ではインドネシアでも有数の中国寺院となった。

中国寺院であるがその入り口には通過する人を睨み付ける石像がある。ラクササ(→945)という魔よけのヒンドゥーの守護神で日本の古刹の仁王様の役割である。ラクササが見られるのはバリの寺院であるが、ジョグジャのクラトンにもある。何れにせよインドネシア特有のものである。これが中国寺院に違和感なく存在するのがインドネシアである。



三保洞廟にある錨
2015/5/14 編者撮影

三宝廟はジャワ人のイスラム教徒と中国系の仏教徒の両者により崇拝されているという不思議な寺院である。鄭和の艦隊の船が残したという錆びた錨が大切に祭ってある。鄭和への個人崇拝とインドネシア人の金属信仰(→701)が結びついたものであろう。

スマランの南郊にウンガラン (Ungarang 2050m) 山があり、その南側の高所に「グドン・ソゴ (Gedung Songo)」というヒンドゥー教寺院遺跡がある。一帯に石造の台が 9 箇所分散しているため、まとめてグドン・ソゴ (9つの寺院) といわれるが、現存しているのは7遺跡である。

グドン・ソゴの建設時期は8世紀頃と推定されており、ヒンドゥー遺跡としてはディエン高原の遺跡とプランバナナ遺跡の中間に位置付けられる。古代ジャワ

においてヒンドゥー教はスマランに上陸して内陸部へ浸透した道程の証であろう。

グドン・ソゴの建物もさることながら素晴らしいのは視界である。クドゥ盆地を見下ろし、ムルバブ (Merbabu 3142m) 山、ムラピ山、スンビン (Sumbing 3371m) 山、スンドロ山の 3000m 級の秀峰を近くにあるいは遠くに望む絶景である。



グドン・ソゴ
2014/10/31 編者撮影

スマランの近くの山中にキリスト修道院があるらしい。というのはデヴィ夫人(→363)の自伝にスカルノ大統領との痴話喧嘩の果てに修道院へ逃げ込み、大統領の詫び状を持って政府の高官が迎えにくるまで籠城^{ろうじょう}したようなことが書いてある。

夫人の自己顕示はとにかく、興味があったのはイスラムのインドネシアにおいて独裁者であるスカルノ大統領に対して治外法権のような形でキリスト修道院が存在したことである。多分、サラティガ (Salatiga) 辺りと思われるが、現在この修道院の情報は皆目ないので、存在していたかどうかも定かでない。別にデヴィ夫人の話の頭から疑っているわけではない。⇒666.鄭和の艦隊

¹⁷⁾ 漢字では「三保洞」と書く。

136. パシシル・中部ジャワ

ジャワ海に面した「パシシル (Pasisir)」という沿岸地帯は中部ジャワを中心に西部ジャワ、東部ジャワの沿岸と連なっている。中部ジャワの沿岸地帯はスマラン以外に下記の港や町がある。

ドゥマック (Demak) はマジャパヒト王国(→248)を引き継ぐイスラム教国家として16世紀前半にジャワに覇権を唱えたドゥマック王国(→249)の所在地である。3代続いた後の1550年頃、沿岸の中心はジュパラに移る。かつてドゥマックはジャワ海に面した港町であったが土砂の堆積のため内陸部に後退している。

1468年に建設されたアグン・ドゥマック (Agung Demak) モスクはヒンドゥー建築の名残をとどめている。王国建設者ラデン・パタ(→249)の墓がある。ジャワで最も由緒あるモスクだけにここに7回おまいりすればメッカ1回に相当するということで巡礼月は賑わう。ワリソゴ(→712)の一人、スナン・カリジョゴの墓が郊外にある。

今はさびれた田舎町のジュパラ (Jepara) であるが、17世紀は重要な港町であった。カルティニ(→342)の生地であり町にカルティニ博物館がある。

ジュパラは幾何学模様のジャワ様式の木彫り家具で知られる。幾何学模様はイスラムの影響である。硬い木材に刻んだ精密な模様を見ているとその労苦に賛嘆するばかりである。ウィルヘルミナ女王の結婚式の贈り物にパ・シンゴ作のジュパラ彫りのチークの小箱が贈られたと記録にあるからよほど立派なものに違いない。

インドネシアの木彫り彫刻といえば海外ではバリ島やアスマット族(→665)が有名であるが、インドネシアで金持ちが重宝しているのはジュパラ産の木彫り家具である。

プカロンガン (Pekalongan) は今日も現役の港町であり県都である。プカロンガン様式というバティック(→927)のデザインは中国の影響を受けた繊細な図柄である。クジャウエンの重厚な色彩とデザインに対してプカロンガン様式は明るく華やかである。

東部ジャワ州に近いラスム (Lasem) もバティックで知られる。プカロンガンの青色に対してラスムは赤色が鮮やかである。

クドゥス (Kudus) は海岸から少し入るが、ジャワで最も早くイスラム化した所である。ワリソゴの一人スナン・クドゥスによって1546年モスクが建てられたことが地名の由来である。由緒あるモスクはヒンドゥーの塔があり、モスクの入口はバリ寺院で見るヒンドゥーの割れ門である。

今日ではクドゥスは県都であり、クレテック煙草(→836)の生産地として有名である。工場に女工が溢れるばかりに立ち並ぶ熱気を見ているとカルメンが現れそうである。

中部ジャワと東部ジャワの境界の海岸にムリヤ (Muria) 山系があり、半島となってジャワ海に出張っている。スハルト大統領当時にこの半島に原子力発電所の計画が発表された。後に大統領になったハビビ(→454)がその推進者であったが、経済危機で頓挫したままである。

⇒137.パシシル(東部ジャワ)